

浄土

11
1994

死は浄土の門

美濃部薫一

旅

御前崎から松崎へ

夏 攸吾

好評連載

吉川英明 関 容子

稲葉小太郎 須藤隆仙

座談会 日本の都市公園を考える



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

アカウミガメのくる海、御前崎海岸



写真—夏 攸吾

ぐるり駿河湾



孵化した子亀たちは海をめざす



砂中の産床からはいだした子亀

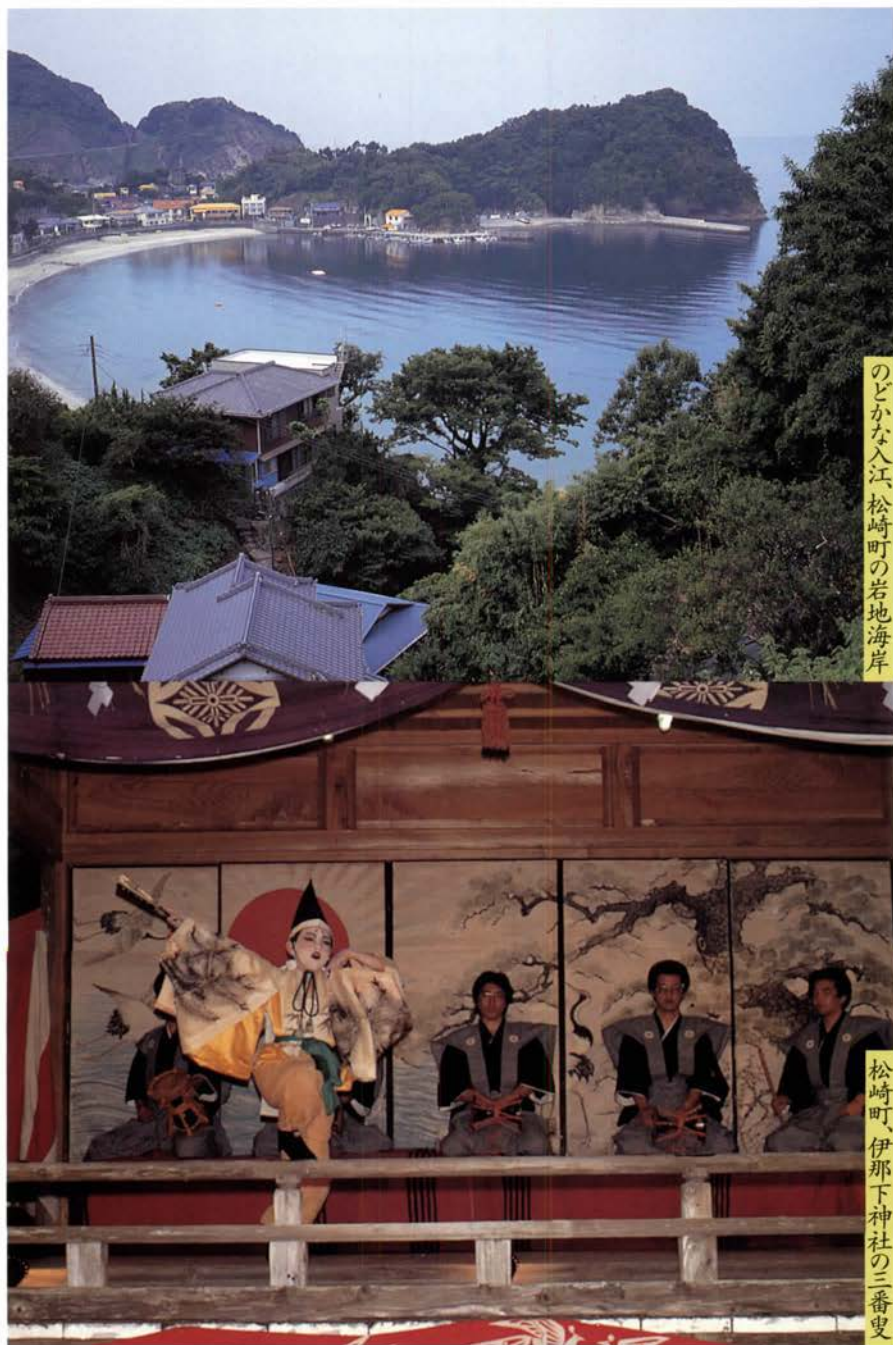


駿河湾の富士山(西伊豆、戸田村)

のどかな入江、松崎町の岩地海岸

松崎町、伊那下神社の三番叟

さんばさん





入江長八の鍔絵「春暁の図」



なまこ壁の伊豆の長八美術館(松崎町)

浄土



1994/11月号 目次

[カラー口絵]ぐるり駿河湾……………写真=夏 攸吾	3
死は浄土の門——私の臨死体験から—— 美野部薫一	8
御前崎から松崎へ……………夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——⑩	
どうでもいいこと……………吉川英明	24
楽屋ゆかた——②	
中村吉之丞(二)……………関 容子	32
現代の快僧——その9	
反原発運動の果てに……………稲葉小太郎	38
念仏信仰の系譜——中国編——④……………須藤隆仙	50
[座談会]	
日本の都市公園を考える……………	58
編集後記……………	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下
表紙撮影=松本立夫
目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

死は浄土の門

私の臨死体験から

美濃部薫一

それは今年の一月十八日のことでした。

夕方から日本仏教保育協会の埼玉県支部の集まりがあるというので、自宅のある草加から浦和に出かけました。出かけるときから頭が痛く、体もだるかったのですが、県の協会の会長をしていましたので休むわけにもいきません。しょ

うがないな、と思いながら出かけたのでした。

ところが、会議が始まってしばらくすると、先程までの頭痛などとは比べようもないほどの激しい頭痛におそわれ、さらに目が回り、言葉もよく話せないようになってしまったのです。すぐに救急車が呼ばれ、乗せられたのですが、



そこいらへんからはもう意識は無くなっていたようでした。

あとから聞いた話ですが、救急車の中ではもうほとんど絶命状態になっていたようです。救急車は、会議に同行していた私の幼稚園の副園長の指示で、私の長女が外科医をしている日本医大に向かっていたのですが、その途中でどこかの病院に寄り、医師を呼んで点滴や他の応急救置をしていた、ということでした。

もちろん、私はそんなこと知るよしもなく眠り続け、病院に運ばれたわけですが、この病院に着いたあたりから不思議なことが始まったのです。

それは、集中治療室（この部屋に運びこまれたことはあとから知らされたことでした）に寝かされたとき、医師や看護婦が点滴などの用意

をしながら、

「もう駄目かな、まだ大丈夫だ、脈があるぞ。

なんとか助けなければ」

などと話しあっている声が聞こえてきたのです。

しかし、その声を聞いている私には、医師や看護婦の姿が、白衣の姿でありながら浄土の聖衆、菩薩さまのように見えているのです。菩薩さまたちが私ひとりのために、私を囲んで救いを念願しているように見えたのでした。

よく、お念仏の信者が亡くなるときには、極楽浄土から阿弥陀さまや観音、勢至などの諸菩薩が来迎してくださる、ということが言われています。

私も東本願寺派の僧侶で、また、学生たちにも真宗の学問を教えたりしている身ですから、普段からお念仏も称えていますし、檀信徒など

にもそのような来迎があると教えていました。

もちろん法然上人や親鸞聖人の教えにもそうしたことが書かれていますし、そうしたことを体験した人の書物なども読んだことがあります。

しかし、それを本当に見たわけではありませんから、あると信じてはいましたが、一抹の不安もあったのです。

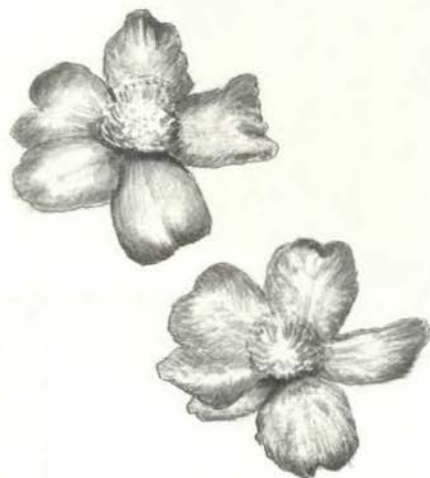
この集中治療室での体験は、そのような不安をもっていた私に、阿弥陀さまが「このとおり来迎はあるんですよ」と見せてくれたように思えてなりませんでした。

他者から見れば、無意識状態の私なのですが、私自身は、無意識の中の意識でこのようなことを感じていたのです。そして、そう思えると、ただありがたくて、もったいなくて、お念仏を称えながら、涙が次から次へと溢れてくるのを

感じていました。

しかし、これは私の臨死体験のまだまだ始まりだったのです。

私は、この来迎を感じながら死を意識したようでした。このまま死ねば何もない、ただ念仏がある、死ねば明日の業もなく、安心して自然



のはからいにまかされ、永遠の生（浄土）が開けてくる、と思えたのです。

死が怖いものだと少しも思いませんでした。それよりも、すべての私の業が尽き果てて、すべての執着の重荷をおろしたといましようか、広々とした世界が開けた感じで、親鸞聖人が「大異門に生ずる」と仰せられたお言葉のとおりだということも感じていたのです。

死は浄土の門だったのです。お念仏がこの門に導いてくれるのです。そして、死の次の生は楽しい仏さまの世界だと実感しました。

お経に「光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨」（光明は、あまねく十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず）という言葉がありますが、まさにそのとおりなのです。往生なのです。またまた喜びを感じました。

また、これは、私が無意識状態の中のいつごろのことだったかわかりませんが、首から上の頭が無くなっていたように実感していたときがあったんです。どのくらいの時間そうだったのかもわかりませんが、とにかくその間はまったく音が聞こえないのです。無音の世界で、まるで無声映画を見ているような状態でした。涅槃寂静という言葉がありますが、この寂静の言葉がびつたりの感じで、その中にいい香りがあり、そして冴えた光、『阿弥陀経』にある青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、というように、青い色には青い光、赤い色には赤い光が輝いているんです。眩しいばかりの光の世界という感じですね。

私はこの寂静の世界に入って、ただお念仏がわいてくることに気づきました。そしてこのと

き、私の世界、すなわち小宇宙を生かされたのは、この頭脳だったと知らされました。つまりそれは、私は頭脳で生かされていたことを感じたのです。そしてさらに、親鸞聖人が「念仏は義なきを義とす」とあらわされましたように、自力のはからいをするところに、阿弥陀さまの救いがあるということの本当の意味が感得できたのです。

でも、この中に阿弥陀さまとか菩薩さまが金色に輝いておわします、ということはありませんでした。それより、お念仏の智慧の世界の中で、お称名の言葉がみんな生きて、これが全部阿弥陀さまの説法を聞いているように、耳からではなく身に響いてくる、というような感じで、それがとてもありがたく思えました。

また、さらに、こうしたもののすべてが私を

包んで、私ひとりのためにこの世界があるように思えるとともに、この世界がそれを私に教えてくれているんだな、って思えてきたのです。こうしたことがあってから、また不異議なことがあったんです。

真宗では墓碑によく「俱会一処」と刻まれています。これは『阿弥陀經』にある言葉で、亡くなったあとはみんな同じ極楽浄土で会うことができる、ということなんです。これを体験したんです。

つまり、死んだ人に次から次へと会ったんです。

東本願寺派の先年亡くなられた前のご法主が現われて、「ずいぶんご苦勞さまでした。なつかしいですね」と言うんです。それで私も「ここでお会いできたことはありがたいことです」

と言つて土下座しているんです。それから学生のころの指導教授をはじめとした先生方やお世話になった人、友人などが不思議なほど次から次へと現われ、「やあ、しばらくでした、娑婆



にいるころは大変お世話になりましたが、よくあなたもここへおいでくださいましたね」というような感じで話しかけてくるんです。また、母が涙を流して法悦を語る声、「どこどこまで

も如来さまが護つてくださる」という声も聞こえてきました。それから、ある刑務所で私が教師として会っていたA君が「先生にはご恩がある。私が浄土へ往つたら、ご恩返して浄土から先生を護っています」と言つて逝つた彼の言葉が届いてきたりもしました。

これらはほんとうに楽しい語らいで、恨めしい人も、いやな人もなく、だれもが仏さまというか、諸仏諸菩薩のようで、それらに囲まれていて、こころ常に浄土にいる、という言葉を実感させられ、感動しました。

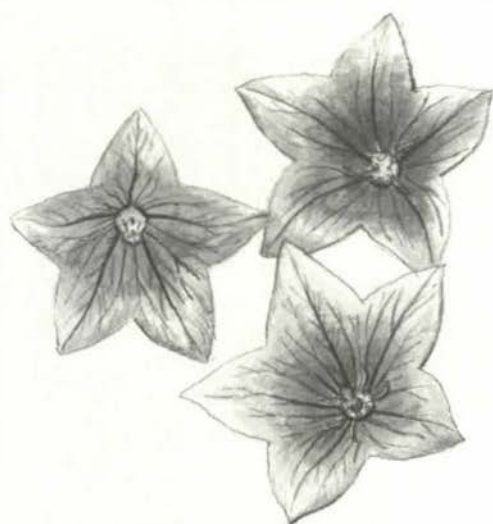
よく、こういう体験をした人が、お花畑があつたとか山があつたとか言っていますが、私はそういうものは見ませんでした。ただ光で明るくという記憶はあるんですが、お花畑とかは見ることができませんでした。

私が意識を失つていたのは二日間でした。脳梗塞ということでしたが、私にはこの二日間がとても短く感じられて、意識を取り戻したときは、まだ倒れた日の十八日だと思つていたのです。周囲の人に聞けば、ずいぶんいびきをかいたり、またときにはお念仏を称えているように口を動かしていた、といいますが、もちろん私はそんなことを覚えてはいません。

これを臨死体験というのか、単に夢というのか、私には判断できません。夢ならば日の経過とともに、この体験の記憶も薄れていくのでしようが、半年以上経つた今日でも、その記憶は薄れるどころか、私の実体験として私の中に、忘れることができずに強く刻みこまれているのです。

そして、この体験から私が得たことは、いろ

いろなお経に説かれている歓喜の世界、よろこびの世界が、臨終のとき、いのちが終わるときにはんとうに来るんだな、ということです。そして、だから死んでいく人はみんな喜んでいくんだな、ということ自分をさらに確信した



思いがしたのです。そしてまた、今回は助かってしまいました。が、このようなものならいつ死んでもいいな、という気がしています。安心して。たような気なんです。

意識を取り戻した私は、それから三カ月間のリハビリで、不自由だった左半身や口もなんと動かせるようになりましたが、この両足で自分の体重を支えて立てたとき、私は、地球が回って私を支えている引力の力を感じ、この引力こそ、仏さまの力——本願力——だと思え、感泣してしまいました。

そういえば、この体験から私は、日頃おきるさまざまな出来事が、仏さまが私のためにしてくれているはからいである、とますます強く感じられ、ありがたく思えてくるのであります。

(東京本願寺総務・文学博士)

御前崎から 松崎へ

文と写真——夏 攸吾

子亀の湧く浜

「そこに、ぼちつと頭が見えるでしょ」
懐中電灯に照らされた平らな砂の、
蟻地獄のように凹んだところに、黒い
豆粒みたいなのがひとつ。……じつと
動かない……。



「休んでるんでしょうかね」、小声で尋ねる。

「卵の殻を破って、砂から這い出してくるのは、重労働でしょうからね」、Uさんがいう。

同じような窪みは、ほかにも二カ所ほど。



駿河湾西端、御前崎の灯台

九月に入ってもまだ暑い夜の続く御前崎の浜、時計は八時を回っていた。浜といっても、そこは人工の孵化場。

Uさんは御前崎町の教育委員会社会教育係長、この季節はアカウミガメの世話係になる。

およそ五キロほどの御前崎の浜には、五月の終わるところから八月にかけての真夜中、アカウミガメが産卵にやってくる。多いときには、一晩に七〜八頭が上陸し、平均して百二十個くらいの卵を産む。

後ろ肢をスコップにして深さ五十〜六十センチ、底の広い壺形の穴を掘るという。産卵の様子は映像でしか知らないが、ピンポン玉のような、ぶよぶよ卵は私も見たことがある。

親亀は三時間ほどで海に帰り、孵化は砂の寝床まかせ。這い出した子亀は大洋で、親亀との再会を果たせるのだろうか……。

この〈御前崎のアカウミガメおよびその産卵地〉は、一九八〇年に国の天然記念物に指定されている。町では八四年に、生態観察と保護の目的で孵化場を作った。

海亀の行動は、波打ち際と産卵場所の間、砂に残る逆Vの字の這った跡で歴然、だから卵を盗まれもする。そこで保護観察員たちが毎朝、浜を巡回し、見つけた卵はすべて孵化場に移すことにしたわけだ。

そこには、卵を保護した日付と発見場所、個数を書いた木札がいくつも立

駿河湾東端、石廊崎の海



っている。

孵化までに、およそ六十日。殻を破った子亀は、自力で砂の穴から這い出す。卵の体積が減る分、砂が凹む理屈になるらしい。ひとつ卵かかえると、それが刺激になってほかの卵も孵化を誘発されるようだ、という。

「砂が目に入らないのかしら……」

そばから、かみさんが心配そうに尋ねる。

刻が過ぎ、砂の凹みがさらに深くなつたような、ときたま砂の動く気配も

あり……けれどもまだ……頭だけ出した子亀もじっとしたまま。砂の中の、見えない産床を慮りつつ、ふと、問うてみた。

「亀の卵、食べたことありますか」

トンデモナイ、とUさんが手を振る。

「海亀のスープなんてのがあるくらいだから、食べられるんでしょうけど……他人から聞いた話だと、脂っこくて、茹で卵にはならないんだそうですよ……」

やがて九時もだいぶ回ったころ、懐中電灯を照らしたUさんの低い声。

「おつ、そろそろ、きたかな」

見れば白い窪みから、平泳ぎよろしく肢で砂をかき、甲長二―四センチほどの子亀たちがピヨピヨこ這い出してくる。あつけにとられるばかりの素



吉田港のシラス水揚げ

早さ、まさに「湧く」ごとく、最盛期の様子は「噴く」ようだといさんはいう。とにかく、それからの一刻は、私もかみさんも、ただ喚声の人。

生命の誕生の瞬間というものが、なぜこれほどまでに感動と興奮を誘うのか、不思議に想う暇もない。考えてみれば死の瞬間だって、同じだろうに……。

子亀たちは、人工浜の隅に用意された盥たらいの海水プールを目指す。なかには見当ちがいの方角に這うものもいるが、懷中電灯で水を照らしてやると、向きを変える。

孵化したばかりの子亀が自然に海を目指すのは、匂いによるのだろーといわれてきたが、どうやら光に誘われるというのが正しいらしい。海には母性

の光明がやどる、だから闇夜でも海は明るい……。

かみさんのほうは、そんな理屈なんぞそっちのけ、「ほらほら、こっちよ」、目にうつすらと涙うかべて呼びかけるのだった。

その晩、四十匹あまりが誕生した。

駿河湾を渡って西伊豆へ

翌朝七時、浴衣姿の宿泊客たちに見送られ、灯台下の浜で、うち十匹が放流された。

「ほかのは暗いうちに放してやりまして、それが自然ですから。これは御前崎のアカウミガメを知ってもらいための、PR用です」

Uさんが淡く笑う。明るくなってか

松崎町、伊豆の長八美術館



らの海には、海鳥や大魚など害敵も多い。

それでも放された子亀たちは、海に向かつて健気に這う。元気なの、ひ弱なの、素早い、鈍いの、と個体差はあるが、その砂に残された軌跡は、一途。

「一生懸命って、すてきね」

まもなく打ち寄せる波に乗り、波間に頭を見え隠れさせながら去り行く子亀たちに、かみさんはずっと手を振り続けた。

こうして海に帰った子亀たちのうち、親亀になるまで生き残れるのは、せいぜい一パーセント弱だろうという。御前崎での孵化数は多い年で三千くらい。私はその生の厳しさを想った……。

私にとつての御前崎はこれまで縁が浅く、見て通りすぎるばかりだった。

岬にしては先端の尖りに乏しく、情感のにじみにくいせいもあろう。それが、かみさん連れてアカウミガメの放流を見に行こう、ひよんな思いつきから解消されたことになる。

この御前崎を西端に、伊豆半島の石廊崎を東端にして太平洋から大きく入りこむ駿河湾沿いを、西伊豆へと走る。吉田の漁港で獲れたてのシラス干しをまとめ買い、もうじき秋のサクラエビ漁もはじまる……私はこの海をいとおしむ者だが、対岸までの距離は長い。思いたつて、田子の浦から土肥行きのフェリーに乗り、がむしやらに走るばかりが能てはないことを痛感する。

松崎港、民芸茶房「松崎のお母さん」(左) 小さな入江が続く松崎の海(下)



ドライブでは心身疲労避けがたい伊豆半島への遠い道も、土肥あたりからなら楽ちん、目指す松崎町まで鼻唄の間だ。

私にとっての松崎は、まだこれからの御前崎に比べて緑が深い。町が「花とロマンの里」の誘客キャンペーンに

乗り出したところから、もうかれこれ二十年のつきあいになる。その割りに貢献は少なくて、二、三の小さな記事と関係するガイドブック一冊を書いただけ。にもかかわらず、たがいにうまのあうところもあってか、疎遠にもならず、かといってあまり深入りもせず、いくたびも通ううちに親しい知己もふえた。

この町の大きな財産のひとつに、鏝(こ)絵の入江長八がある。立派な記念の美術館ができたときには、祝いの角樽を提げて行った。

この町で除夜の鐘も撞き、温泉付きの部屋を借りて短いながら一夏も過ごし、秋まつりの三番叟(さんぱんそう)を長閑(のどか)に観賞もしている。



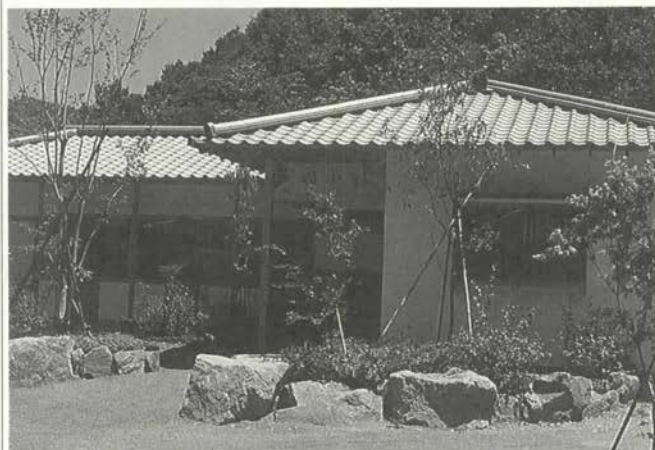
かみさんは当初、こうした私のいわば取材縁故地に連れて行かれるのを、いやがったものだ。挨拶が多くて気忙しいのは、よくわかる。しかし、それもとび重なつて年経てみれば、松崎は彼女にとってもすでに縁故の地だった。親しみが増せば挨拶も軽くなり、居心地はよくなる。

とある土地との結びつきは畢竟、人

とのつながり。港には、私が「松崎のお母さん」と慕うひとの磯料理店民芸茶房があり、気のおけない同年配の息が板場をきりまわす。

松崎、岩地、石部、雲見と続く浜のなかでは、私には岩地海岸が好ましい。ちなみに町の顔ともいうべき松崎海岸は、某大手のチェーンホテルが進出、それにあわせてように進んだ改修美粧でそこなわれ、つまらないよそゆきの浜に墮落した。地元の人がいわないのなら、私が「この浜を還せ」と叫びたいくらいだ。

そんなこともなく、つつましくあたたかい岩地の海岸には、民宿草創期から細腕でがんばりとおした喜和ちゃんのお宿かいとく丸。



投宿をききつけ、その晩には酒を片手に訪れてくれる友がある。Mさんは何年ぶりかで町の産業観光課に復帰し、

人力車伊豆松崎組を組織。元観光協会のKさんはいま、そば処小邨^{こむら}の主におさまっている。この芸達者な二人は、かつて私が名付けた「松崎芸能座」の主役でもあった。

かみさんと二人、晩夏の少しばかり気だるい浜で、のんびりと二日を過ごした。

もはや縁故の地では、動静もゆったりとそつがない。この境地にいたるまでの歳月を想えば、万感こもごも。失礼して挨拶ぬきに帰っても、南無、許してくださるよき人々の住む土地が、しみじみとありがたかった……。

〈メモ〉 御前崎町商工観光課 0548
— 63 — 6821、松崎町産業観光課
0558 — 42 — 1111。

午後の日差しの中で

〈第十回〉

どうづでもいいこと

吉川英明



街を歩いていると、些細なことが気に障ったり、どうしてもいいようなことに腹が立ったりする。

「年のせいだよ」

と言う人もいるが、私の場合、これは、今に始まったことではないような気がする。かなり若いころから、つまらないことに腹を立ててきたように思う。

かといって、それにいちいち文句を言ったり、喧嘩を売ったりするわけではないのだが、困ったことに、そうした苛々いらいらはストレスとなって胸に溜まるようなのだ。

それが、時々、何かが引き金となって爆発する。いわゆる癇癪かんしゃくを起こして怒鳴った後、なにも怒鳴るまでのことはなかったのにと反省するのだが、その原因は、日頃のこうした小さな苛

苛にあるらしい。

時折、吐き出せばいいとわかっているのだが、その機会と相手にはなかなか恵まれない。恐縮だが、この誌面を借りて吐露するので、馬鹿馬鹿しいとお思いでない方は、おつき合い願いたい。

まず、食べ物のことからいこう。

最近、蕎麦屋で、何を頼んでもレンゲをつけてくる店がある。

あれが、どうも気に入らない。

レンゲはもともと、鍋焼きうどんなど、直接器に口をつけて汁を飲めないものにだけついていたはずだ。それが最近たぬきそばやきつねうどん、果てはかけそばにまでついてくる。かけそばの汁をレンゲで吸ってる図などはサマにならない。

ラーメン屋にもレンゲを出す店が増えてきたが、ラーメンにしても、レンゲで汁を飲むというイメージは以前はなかった。何々ラーメンと名を冠した種類が増えるにつれ、次第に定着してきたのだろう。

ただ、どうせつけるなら、陶製のものにして欲しい。よく、しやれたつもりなのか、竹製のものや塗りのしやもじを出す店があるが、あれはどうにも汚らしい。塗りの物など、大抵は口の当たる部分がはげている。何百人、何千人の唇になめられて、この塗りがはげたのだと思うと、とても口をつける気にならなくなる。

何にでもレンゲをつけるものだから、変な食べ方が流行り出した。麺を、わざわざ一旦レンゲの上に乗せて、そこからまた箸で食べるという方法である。これが、上品な食べ方だと思っ

いるのか、若い女性に多い。見ていて苛々する。麺は、たっぷりした汁の中から、まとわりついた汁ごと吸り上げるからうまいのである。

蕎麦屋といえば、カツ井や天井には、文字通りの「井」と「重」の二種類があつて、大抵の場合、「井」は「並」であり、「重」は「上」である。これはまあいいでしょう。

ところが、鰻屋に行くと、「井」がない。松竹梅とか何とか階級はあるのに、全部鰻重で鰻井がないのである。これが、今東京では一般的な鰻屋だ。

何故、鰻井がないのか。大体、井物は何井にせよ、その名のとおり井で食べるに限る。熱々の御飯を盛られて、糸尻まで熱くなった大振りの井に手を焼きながら、かつ込むのが井の味である。重箱は、乙に澄まして気取っているうえ、正

確に計ったことはないのだが、飯が少ないような気がするのだ。

大分前、赤坂の鰻屋での昼時だった。隣に座ったご老人が、俺は漆に弱くて重箱は駄目だと言ひ張つて、とうとう重箱を井に替えさせたのをこの眼で見た。見ていて、なるほど感心したが、私などはまだ、そのわがままが通る年齢ではないと自重している。ただ、あのご老人、最近のプラスチックの重箱を使う鰻屋に行ったらどうするだろうと、他人事ながら心配している。

食べ物屋にいる若い男で、癪に障るのは、帽子をかぶったまま物を食う奴だ。大抵は、野球帽のような形をした帽子だ。当たり前だという顔で、ビールを飲み物を食う。こんな奴が横に來ると、胸が煮えくり返つて食事をした気がしなくなる。



食事の場での若い女性の喫煙も、見ていて気持ちのよいものではない。

大体、煙草なんていうものは、女性の場合、ある程度の年齢に達した、それも美形が、ほっそりとした指先に挟んで、優雅に控え目に燦らしてこそ景色になる。

まだ半分子供みたいな顔と頭脳しか持たないくせに、若いというだけで周りからちやほやされている娘達が、大きな顔をして煙を吐き散らしているのを見ると、本気で注意してやりたくなってくる。

ただ、彼女等の場合、煙草を喫いながら、哀れにも救い難い行為をする癖があり、私は、それを見ながら溜飲を下げるだけで我慢することになっている。

それは、彼女等が時折、臆面もなく鼻から煙

午後の日差しの中で

を吐くことである。

煙草を喫って鼻から吐くと、煙は二本の筋に別れて、鼻の穴の向きを明示する。折角念入りに化粧した顔から、ほとんど正面九十度に広がって二本の煙が吹き出るのを見てみると、おかしいのを通り越して気の毒になってくる。少しぐらい鼻の格好が悪くても、息をしているだけならさほど目立たないのに、わざわざ周囲の注意を喚起しているようなものである。時々、左右非対照の角度で煙が走って行く鼻もあり、そんな時には笑いを噛み殺していると怒りも鎮まるのだ。

しかし、どうして日本の女性は、こうも行儀が悪くなってしまったのだろう。

昔は、男でも女でも、歩きながら物を食べるなど最低のマナーだったが、今は皆平気である。

これは、外国人や外国映画の影響だと思っただが、歩きながら物を食べる悪習を普及させた強力な映画の一つが、あの「ローマの休日」だったことを、私は記憶している。

あの名画で、ヘップバーン・カットが大流行したのは今でも語り草になっている。一時は東京中、ドッジボールのような丸顔も、ヘチマのような長顔も、押し並べて短髪になってしまっただけで辟易したものだった。

そして、もう一つ、これはあまり指摘されていないのだが、あの映画のヒットした後、街に、歩きながらソフトクリームを舐めている女性の姿が、やたらに増えたのは事実である。

あの髪型だって、ヘップバーンだから似合ったのであり、ソフトクリームを歩きながら舐めたって、彼女だから愛らしかったのだ。それを無

条件に模倣する神経が私にはわからない。有楽町の町角で、まん丸顔の短髪がソフトクリームを舐めながら歩いて来たのにばったり出会い、陸に上がった河童が胡瓜をかじっているみたいだと、仲間と大笑いしたのを昨日のように思い出す。

男女を問わず、歩きながら、食ったり飲んだりする光景にはどうも馴染めない。

だから、若い連中が、運転しながら缶ジュースやお茶を飲んでいるのを見ると腹が立つ。運転している間ぐらい、我慢できないのかと思うのである。これはもう一種のファッションになっ
ていて、車に、ジュースの缶や紙コップを保持するアクセサリーがついていないと格好が悪いらしい。どうにも嫌な習慣だ。

車というと、これは年配者に多いのだが、座

席に白いレースのシートカバーをつけている車も気色が悪い。ハイヤーや運転手付きの車ならいざ知らず、応接間じやあるまいし、車にレースという感覚がちぐはぐなのだ。ダークスーツにネクタイを締めてジョギングしているのを見ているような気分になる。

年配者に矛先が行ったので、ついでに書く、駅の切符売り場で、券売機の前にでんとハンドバッグを置いてから、運賃表を見上げて行く先を探しているおばさん……あれには、急いでいない時でも腹が立つ。後ろで人が待っていることなど、全然心中にないのだ。

以上、そんなこと、どうでもいいじゃないかと言う人もいるだろう。それもわかる。

だが、これだけは本当に何とかして欲しいということを最後に書こう。



冬の、ビルの暖房だ。デパートやショッピングビルの暖房である。とにかく暑すぎる。

中で働いている従業員の服装を見ると、男はワイシャツ、女はブラウスで、たまにカーデイガンか何かを羽織っている程度である。その服装に合わせて暖房の温度が設定されているのだ。

冗談じゃない。こっちは寒い表を歩いて来て、コートにマフラーという完全武装だ。五分ほど店内を歩いただけで、じわっと汗が吹き出してくる。たまらなくなつて、コートやマフラーは脱いで手に持つのだが、それでも暑がりて汗かきの私は三十分と経たないうちに汗まみれになってしまう。

居たたまれなくなつて飛び出して、お決まりのように風邪を引く。毎年冬になると、このくり返しである。

ま、私は人一倍汗かきなものだから、被害も大きいのだろうが、見ていると、コートを脱いで手に持っている人は結構多い。

それでも、私を含めて、文句を言わないのは、面倒だからである。店員に言つたつて、上には伝わらない。たくさんの店が入ったショッピングビルなら、ビルの管理者に会わなければならぬだろうし、デパートなら支店長かそのクラスの責任者に会わなければ、埒が明かないだろう。一人の客が、暖房のことで支店長に会いたいなどと言つたところで、扱いは目に見えている。だから、皆黙つて我慢しているのだ。

それに、軽装の店員たちは、真冬に汗をかいてる客を見て、何とも思わないのだろうか。文字通り、全員、涼しい顔なのである。

こういうのが、一番腹が立つ。

(作家)

楽屋ゆかた

その二

中村吉之丞(二)

吉之丞は昭和十四年に神楽坂の津久戸小学校に入学した。筑土^{つくど}八幡のすぐそばにある学校だった。母親が「子供の教育に悪い」と言って飲食店をやめた、という話はいかにもひと昔前の健気な感じがあつて私は好きだ。しかし女手一つの針仕事で立てる生計は細々として、吉之丞一人を満足に育てかねたという。

「それでも初めはよかったんですが、母が神経痛からリユーマチになつて、針も持てなきや帯も締められない、つてことになりました。朝、

七厘で火を起して御飯焚いて、食べさしてから学校へ行く、月謝も滞るから先生にいろいろ訊かれたりして、何でこんなところへ生れてきちゃったのかしら、と情けなくなりました。」

吉之丞が役者になるキツカケはそのころ訪れた。近所に中村半吾という、役者のような名前の老人とその奥さんがいて、吉之丞が遊びに行くとき御馳走してくれたり、お菓子をくれたりした。吉之丞が可愛らしい少年だったからだろう。そう言えば、入学前に気管支が弱くて助川へ転

関 容子



地療養していたころ、海辺で母親と記念写真を撮ったときに写真屋が「お嬢ちゃん」と呼んだという。「髪も濡れて長かったし、水着が女の子じみていたからだろうと吉之丞は言うが、目鼻立ちの整った優しい顔立ちだったからだろう。「半吾さんのお宅は、門構えの、お庭の広い立派なおうちで、息子さんは暁星ボーイでした。そのお父さんにしちや半吾さんは大変な年輩の方だったように記憶しております。あたしは三年生くらいでした。それで母が半吾さんのお宅へお礼に伺うんですね。それが御縁で、『あの子、役者にしてみてはどうだい?』って話になったらしく『じゃあ是非お願いします』ってことで、あたしは三代目時蔵旦那のところへ入門するんです。半吾さんは時蔵旦那の遠い親戚に当る方だったようでした。」

三代目中村時蔵は、初代吉右衛門の弟で、長いことその女房役だった人。古風な味わいの顔立ちの立女形で、政岡や重の井や熊谷女房相模^{さがみ}などが当り役。異母弟に勘三郎がいた。

「三代目（時蔵）さんのお宅はそのころ六本木にあつて、そこへ御挨拶に伺いました。まあそれならお子さんがたくさんいるんですよ。歌昇（二代目）さんとか、若くて亡くなったのちの四代目（時蔵）さんとか、錦之助さんとか、賀津雄さんとか……。あたしは錦之助さんと同じ年です。お子さんがいっぱいであたしが嬉しうにしたら、いきなりばあやさんが『これからはお子さん方のことは坊ちゃんと呼ばなきゃいけないよ』って言ったんです。えっ、坊ちゃん……って、あたしはまだ小さくて道理をわきまえないから、抵抗があつたんですね。坊ちゃんなん



吉之丞さんの初舞台は昭和18年8月、11歳の時に「海軍」の中のハワイ二世の役だった。

て言えないや、と思いました。生意気だったんですね。母がおでん屋をした時分、お客さんから坊や坊やつて可愛がられた覚えがあったし。それで、あのオ、とか、ちよっと、とか、ごまかして呼んでおりました(笑)。」

吉之丞は師匠の時蔵から蝶丸という名前をもらう。学校を早引けして楽屋へ行き、時蔵の身のまわりの用事をつとめた。合引(あひびき)（黒塗りの腰

掛)や岡持(湯呑や小物類が入れてある)を持って、師匠のあとをついてまわるが、ともさんという強面(こゝろ)の男衆に叱られてばかりいたという。

「旦那の芝居が休みのときはおうちへ伺って、トンボ(立廻りのときの宙返り)の稽古をするんですが、あたしは学校でも体操が一番苦手、飛び箱なんか大嫌いでしたから、それがいやでいやでね。でも言われたらやらなきゃなりません。稽古土俵なんてありませんからお部屋に蒲団積んで、まずでんぐり返しの稽古をして、それから手拭いを二つ折りにしたのを片手に持って、ポンと返る、って言うんですけど、そんな簡単にいきやしません。上の坊ちゃんと古いお弟子さんとにやいのやいの言われて、こわこわエイツと返ったら、首突いちやいましてね。痛くてオイオイ泣いて、それっきりもういやだつ

て、トンボの稽古はしませんでした。それでも二年近く時蔵旦那のところにお世話になりましたかね。そのうち時蔵さんが吉右衛門一座から離れることになったんです。そのときあたしは播磨屋（初代吉右衛門）の旦那に申し出て、こちらへ残りたい、って言ったんです。で許されて、吉三（四代目）という名前をいただきました。」

吉之丞が子役としてそのころもらう給料は、三十円だった。当時大歌舞伎の一等席が八円くらいだったというから、リユーマチで針も持てなくなっていた母親には有り難いことだった。

「あたしが役者になった昭和十七年は、ちょうどシンガポール陥落で、提灯行列が出たり花電車が出たり、明治座の客席にも『祝シンガポール陥落』なんて提灯下げたり、戦争の旗色がよかったです。が、たんたんいけなくなって、劇場が

閉鎖されたりし始めたので、やむなく役者は軍需工場を慰問して歩いたりしてました。あたしはまだ五年生でしたから、集団疎開……学童疎開というのに行くことになりましたね。母一人置いて行くのは心配でならなかったんですが。

で、真岡市（栃木県）の大楽寺というお寺へ疎開しました。春のことでした。お寺から学校へは一里も歩くんです。おなかですいてすいてね。鉛筆やゴム消しを農家の子供の持つてるお芋と交換したりしましたよ。たまに勤労奉仕で稲刈りの手伝いに行くと、白米のお握りもらえるのがそりや嬉しかったです。でも鎌で指先を切って、血止めもないで泥を塗られたときは情けなかった。そのときお百姓さんが向こうの雑木林を指して『あっちへ行くてねえど。ウルシの木があつからかぶれるど』なんて言う。友だちが、病気になる

と帰してもらえのを見てるので、かぶれりや帰れるかしらと思つて、わざとウルシの葉を首に塗つて、でも待てど暮らせどかぶれない(笑)。」

しかし吉之丞の思いが通じたのか、秋も終るころ、やつとの思いで汽車の切符を手に入れて、母親が迎えに來た。稲刈りも終り、稲叢に霜が降りて、真つ赤に凍えて死んでいるイナゴを取りにやらされ、佃煮にして食べさせられるのがいやでたまらないときだった。

「母親に連れられて、ほうほうの体で東京へ逃げ帰りました。すると役者も召集やら徴用やらで人がいなくなつたので、子役でもいりやあましなので呼ばれて、『道成寺』の坊主に出なさい、つてことになりました。成駒屋さん(歌右衛門)の花子です。あたしは踊りの稽古もろくにしてないのにトットトン踊んなさい、つて言われ

て、吉十郎さんにずいぶん教えてもらったけどできなくて、怒られて泣き泣き覚えましてすよ。」

「トットトン」というのは、花子が「梅とさんさん桜は……」の三段笠の件りを踊つていったん引つこんだあと、今度は所化たちが肌脱ぎになり、「あやめかきつばたは……」と踊るときの前奏を口三味線で言うもの。横一列に並んだ所化が一人置きに立つたり座つたりしてあやめの咲く様を表わす振りがあるが、あそこで間違えたらとても目立つだろう。

「所化の鬘かたむすの中には赤(赤銅)が使つてありますでしよ、戦時中なので軍に供出してしまつて、道成寺の坊主はみんな頭巾で出てました。芯になる役の鬘だけはさすがに取つといたんですが、坊主だの捕手だのの鬘はほとんどで出しちゃつたんですね。戦後んなつて『道成寺』が出たら、坊主



吉之丞に改める前の万之丞最後の舞台は今年4月の「かごつるべ」お咲役だった。

がみんなかぶってるの見て、あら、これが本式な
のかしらん、とびっくりしたものでしたよ(笑)。

ところで吉之丞は、十何年か前、巡業の旅で
久々に真岡市へ行った。出し物はたしか、延若
(三代目)の平作と吉右衛門(二代目)の十兵
衛で「沼津」、三津五郎・八十助の「連獅子」だ
ったという。巡業には頭取(公演の進行や事務
を担当する)がたいてい自転車を一台中持って行

く。町の様子を調べたり、あとで頼まれた買い
物をするのにも便利だからだ。吉之丞は「沼津」
が終ったので、その自転車をちよつと借りて、
「昔の疎開先のお寺を見てきます」と今の旦那
(吉右衛門)に断わりを入れた。
すると吉右衛門が気軽に「おれも一緒に行く
よ」と、公会堂の自転車を借り、思いがけなく
自転車を連ねて大楽寺までのサイクリングにな
った。

「あてずっぽばに行っただんですけど、それが行け
たんですよ。お寺には昔ちようどあたしと同じく
らしいの息子がいて、きかんぼでひどかつたけど、
その人が今は住職で出て来たら面影があるんで、
実はこうこう、と言いますと、懐かしいですね
え、って。旦那はそばに立ってにこにこしながら、
その様子をじっと見てるだけでした。」

反原発運動の 果てに

取材・文 稲葉小太郎

JR岡山駅から伯備線に乗って一時間。中国山地に囲まれた新見市というところに平尾弘衆さんは住んでいる。新見駅に着いて電話すると家族



ひらお・こうしゅう●1953年鳥取県米子市生まれ。岡山県立新見高校卒。吉水学園卒。福井県の西福寺に入るが、師匠の高田良幻さんとともに僧籍離脱。現在は岡山県在住。

の方が、もう車で迎えに行きました、という。
「会うのは初めてですか。でも、すぐわかりますよ……変わってますから」

一緒に住んでいる家族から変わっているといわれるとは、どんなひとなんだろう。不安というより期待の気持ちで待っているところにあられたのは、紺の作務衣を着た年齢不詳の女性。痩せたからだ、度のきつい眼鏡、坊主頭に手拭いを被った姿である。変わっているといえばそうかもしれないが、ぼくだってこの職業をしているだけに変わった人にはたくさんあっている。でも平尾さんがすごいところは外見なんかではなく、その発想と行動にあるのだ。

この連載を続けていていつも思うのは、お坊さんって何なんだろう、ということだ。今の日本では、大きな教団の、高い地位につくことがそのままお坊さんの価値につながる。あるいは伝統のある檀家の多い寺に生まれれば、お坊さんとしての人生は安泰だろう。でもよく考えて

みれば、こういったことは釈尊の生き方とはまったく正反對だということがわかる。

青年シッダールタは二十九歳という男盛りで、家族も、国も、財産も、名誉も、安全も、快樂も捨てて修行の道についた。この世はなぜ苦に満ちているのかというすごく単純な問題を解決したかったからだ。そしてそれは民衆のためとかなにかの真理のためではなく、まず、シッダールタの自分自身の問題だったはずだ。日本仏教の祖師たちだって同様だろう。

そう考えてみると、この連載に登場してくださった「快僧」の方々は誰もが、自分とは何かという根本的な問題を抱え、それを解くために創意工夫してきたことに気づく。ただ皆さんは寺に生まれた。まず、道はあったのだ。

今回お会いした平尾弘衆さんは、在家からの出家である。実人生からはみだしてしまったの



師匠の高田良幻師米寿の祝いで平尾さん(昭和57年9月23日小浜にて)。

である。ところが、四十歳の現在は教団からみだしてしまっている。仏教の教団も、俗世間と変わらないということなのだろうか。

原発銀座のメインストリート

お気づきのとおり平尾さんは時衆を名乗っている。時衆ではない。師匠の高田良幻さんとも僧籍を返上しているからだ。宗祖一遍上人も、生涯を通じて教団も寺も持たなかった。遊行する一遍上人に従うようになった人々は、まわりから「時衆」と呼ばれるようになった。その気持ちで平尾さんは持ち続けている。師弟が教団を離れるそのきっかけとなった出来事について話してもらおう。

平尾弘衆さんのかつての活躍の場は福井県小浜市。若狭湾に面したこの地域は俗に「原発銀座」ともいわれる、原子力発電所がひしめくと

ころである。今年の高速増殖炉「もんじゅ」の稼働は記憶に新しいが、それ以前から全国の三分の一にあたる十四基の原発が福井県に存在している。

原発のあるところには必ず利権が存在する。

利権を求めて業者が集まってくる。一方で原発の安全性をめぐる、電力会社と反対派が対立。地元住民も真つぱたつに割れ、そこへ外から労働組合や市民団体がなだれこむ。

小浜市にある時宗西福寺へ入った平尾さんは、いつしかその流れの真つ只中。原発銀座の表通りを闊歩することになる。

一九八一年本山遊行寺で加行を受けて西福寺に入る直前、敦賀の原発で放射能もれの事故が起こった。

「私は、すごいところに行くんだな」

ニュースを見てそう実感したとおり、着くと

すぐに地元の女性たちから声がかかった。

「原発に反対する女の会」を作りたいというのだ。賛同した平尾さんは学習会のためにお寺を使ってもらうことにした。

それをきっかけに、反原発運動の道を突き進む。原発の危険性を警告したビラを配ったり、デモや集会へ行つて賛成派に野次を飛ばす。

平尾さんの原子力発電に対する考え方はいたってシンプルだ。

「要するにあの中で原爆やってるんでしよう。核廃棄物だって害がなくなるまで何十億年もかかる。どんなに平和利用だといったって、ダメなものはダメなんです」

一九八二年には仲間と語らつて『母子草』と題した小さな機関紙を発行。女としての感覚で、日々の暮らしの中から原発を考えていこうという趣旨だ。手始めにムラサキツユクサを使つて

放射能もれを感知する実験を行なった。微量な放射能に反応したムラサキツユクサの花びらに突然変異が起きて、斑点ができるのだ。その数を数えることによって、放射能もれを知ることができる。

記録を取るうちに、地震のあとなどに突然変異率が急激に上がることがあった。

「ちよつと、おかしいよ。これは何かあったよ」「えつ、うちもそうなの」

仲間たちそれぞれが記録したデータをもとに発電所を追求すると、直後にはなにも報道されなかったのに、放射能もれが発表されたこともあった。

そのやり方は純粹というか単純というか、まわりの思惑なんか気にしない。新聞のインタビュ어도、言っではいけないことまでズバズバ言ってしまう。

なんとも過激な話だが、こうした活動ができたのは実は、つねに西福寺住職で師僧である高田良幻さんの存在があったからである。この高田さんのことに触れないわけにはいかない。

スキヤンダルと中傷

この弟子にしてこの師匠あり。高田さんの晩年の写真を見せてもらったのだが、これぞ怪僧という容貌である。頭頂部ははげ上がり、残った部分は白い髪が長く伸びている。小さなからだに、異様に大きな手が目立つ。だが若いころの写真をみると、芥川龍之介を思わせるハンサムなのだ。

高田良幻さんの生き方は徹底して自由奔放なものだった。明治二十八年生まれの高田さんは十四歳のときに大津の時宗長安寺に弟子入り。本山の宗学林の四年目に天皇制批判の文章を書

き、自主退学。甲府の一蓮寺で下宿していた。

甲府では峡中日報（現在の毎日新聞甲府支局）という新聞において天皇制批判の記事を書いている。

なぜ高田さんがこのように体制批判を行なったのかというと、第一次世界大戦のとき兵役を拒否してふたりの親友が自殺しているからだ。

その後アメリカ帰りの無政府主義者岩佐作太郎の書生となり、みずからもアナキストの道を歩む。大正十一年には出版法違反で六ヶ月、不敬罪で二年間の懲役。

昭和七年三十八歳のときに神戸の一遍上人が亡くなった真光寺に入り、その後は寺から寺へと転々としていた。

流れ着いたのが福井の小浜。五ヶ寺の住職を兼務するようになる。といっても檀家が合計で八十軒くらいしかない小さな寺ばかりなのだ。

このような思想的経歴とは別に、高田さんが変わっているところがもうひとつある。実は高田さんは男色の好みがあったのだ。こんなエピソードがある。吉水学園を終えて寺を探している平尾さんが西福寺へ行くと、一目見て高田さんは気に入ったらしい。すぐさま檀家総代十人を集めて、跡継ぎとして紹介した。

「この貧乏寺にもやつと来てくれるひとがいた。ありがたい。ただ、嫁さんでももらって子どもでもできたら大変だけど」

なんと、平尾さんを男と勘違いしていたのだ。「ちよ……ちよつと待ってください。あたしや尼僧です」

高田さんはひっくり返って驚いたという。

この高田さんと平尾さん、孫よりも年齢の離れた師弟はなぜか大変に気が合った。高田さんは平尾さんの中に、男と女を超越した菩薩のよ



うな理想像を見たのかもしれない。平尾さんは師を、生きた仏教の見本と思った。高田さんは大変な蔵書を持っていたが、その大半はマルクス主義関係で仏教の本はほとんどなかった。そのわけを尋ねると師は、

「私は仏教が嫌いです」

と答えたという。その言葉は字義の解釈にしか目が届かない教学の世界や、組織に捕らわれた教団のあり方に対する気持ちのあらわれなのだろう。だが一方では、葬式のときなどにはお釈迦様から龍樹・世親・無著・一遍・歴代の遊行上人の名前をずらりと並べる血脈を明け方までかかって自筆で書いていた。書きながらも、自分はお釈迦様から確かに伝わるものを受け継いでいるんだという自覚を強くしていたのではな

いか。

師弟はものごとの考え方においても、共通点があった。師は大正デモクラシーの時代に青春を過ごし、平尾さんは第二次大戦が終わりやつと訪れた民主主義の時代に生を受けた。ふたりとも自由には敏感だった。

平尾さんは高田さんを看板に立てて、反原発運動に邁進する。

一九八三年には時宗本山一行が敦賀で神事を行なった際、放射能汚染の犠牲者に対する供養の文章を遊行上人に読ませた。さらにそのいきさつも含めて「原発に反対する仏教者の会」のビラに仕立てて、街頭で配った。

八四年には妙通寺の副住職の中島哲演さんとの間に長男が生まれる。妙通寺は福井でも有数の大きな寺なのだが、中島さんも反原発活動をしているお坊さんだった。



今年の夏、平尾さんは10歳になる息子の阿児^{アニ}さんと四国へ巡礼に出た(7月8日切幡寺)。

直後に籍を入れるのだが、これがかつこうのスキヤンダルの的になってしまった。時宗寺院や檀家さんたちに中傷ビラがまかれる。そのうち寺の電話が盗聴される。夜中の三時、四時に無言電話がかかってくる。

八五年には追われるように西福寺を出る。

しばらくは夫のいる妙通寺で暮らしていたが、八九年次男誕生の直前に妙通寺を出てしまう。

ふつうなら子どもが生まれるとなれば庇護者を求めるものだが、平尾さんは逆。

「しばらくは夫のいる妙通寺で暮らしていたが、八九年次男誕生の直前に妙通寺を出てしまう。ふつうなら子どもが生まれるとなれば庇護者を求めるものだが、平尾さんは逆。しばらくは夫のいる妙通寺で暮らしていたが、八九年次男誕生の直前に妙通寺を出てしまう。」

一遍上人にホレたんです

平尾さんの人生は波瀾万丈紆余曲折。大学を出て就職という当たり前のコースを歩いてきたばくなど、圧倒されてしまう。その平尾さんが

どのようにして出家の道を選んだのか、非常に興味があるところである。

平尾弘衆（本名弘子・法名：炎式房）さんは、昭和二十八年鳥取県米子市の生まれ。事情があって幼いころに実父の姉夫婦に引き取られた。育った家は近在でも有数の大きな窯元で、水瓶などの生活雑器を作っていた。

小学校五年生のとき、祖父の作品を倉敷民芸館の館長外村吉之助さんに届けた際に、「おじいちゃんの跡を継ぐんだよ」と声をかけられ、陶芸家になろうと志す。柳宗悦の本を読みふけるうち、柳が一遍上人に影響を受けて民芸運動を始めたことを知り、一遍上人に引かれるようになった。

「一遍上人にホレたんです」

平尾さんは言う。養父母は留守が多かったの
で、いつも本ばかり読んでいた。からだはここ

にあるのに、こころは中世の時代の『一遍上人
絵伝』、聖絵の世界にあった。

同時に古典落語が大好きで、落語家になりた
いという夢もあった。そこで岡山県立新見高校
家政科を卒業したのちに東京へ出て、新宿の末
広亭で場内係の仕事をやっていた。それだけで
は食べていけないので、水商売などのアルバイト
をしたこともある。時間を見つけては稲荷町
の林家彦六師匠の家を訪ね、いろいろな話を聞
くのが楽しみだった。

しかし、東京暮らしもそのうち行き詰まって、
二十二歳のときに四国の巡礼の旅に出る。帰っ
てからは、

「お坊さんになりたい、私はお坊さんになるん
だ」

ことあるごとにアピールしていた。しかし年
頃の娘のこと、家族がそう簡単には許してくれ

ない。そこで母方のルーツ探しの旅に出て、母の曾祖父が曹洞宗の寺の住職だったことを突き止めた。

さらには、家の近くに自分の力で立派なお地藏さんを作ったことも説得材料になり、晴れて出家を許された。

時宗は修行道場というのがないので、とりあえず京都の吉水学園へ入学。剃髪したのは二十六歳の誕生日。

「やつとお坊さんになれたんだ」

感慨が押し寄せてきた。

しかし、それからの尼僧としての道は、決して生易しいものではなかった。

平尾さんを見ていて思い描くのは、シーソーの上でみんながひとつの方向へ走ろうとしているとき、自分だけはもう一方の端に必死にしがみついてなんとかバランスを取ろうとしている

姿だ。それは主義とか思想的なものでやっていくというより、平尾さんのからだの中にある感覚なのだろう。それは自然が本来持っているホメオスタシスの能力だと思う。

そういえば一遍上人も、自然そのもののひただったと思う。法系としては法然上人の孫弟子に当たるのが、熊野権現で靈感を得たのちは、「阿弥陀仏を信じようが信じまいが、すでに救われている」として、出会う人すべてに念仏札を配り歩いた。その思想は神仏混淆。神道の神神さえも阿弥陀仏の仮の姿として崇敬した。その自然観は、

「よろず生きとし生けるもの山河草木吹く風たつ浪の音までも念仏ならずといふことなし」

汎神論である。彼の念仏も鼓動に合わせて打ち上げるように念仏するという、生命の躍動を感じさせる激しいものだった。念仏がエスカレ

ートすると、ついにはハイになった老若男女が
歓喜雀躍として踊り出す。そのダイナミックさ
は、横っ飛び二メートルというから、すごい。

一遍上人の遊行が、権力と化したときの既成
教団へのアンチテーゼとなったことは間違いな
い。



高田良幻師の遺影を手にする平尾さん（新見市にて）。

一遍上人や平尾さん
の行動は、特殊なこと
なのだろうか。いや、
仏教とは本来そういう
ものだったはずだ。冒
頭に書いたとおり、そ
ういうことを意識的に
行なうのが宗教、特に
仏教ではないだろうか。
ぼくらの文明があまり
にも物質中心に走り過
ぎたとき、バランスシ
ートとして機能してく
れるのが仏教ではない

か。

寺を追われた平尾さんたちは新見駅からさらに車で三十分ほど入った「開拓部落」でコミューンのような共同生活をしていた。アフガニスタンの遊牧民のテント「アフガンパオ」を作り、「婆娑羅庵」と名付けた。婆娑羅大名が活躍した、区別も差別もない混沌とした中世に帰ろうという意味を込めたという。奥には、

「南無阿弥陀仏」

の六文字の名号だけが掲げられていた。

しかし、婆娑羅庵での最初の礼拝は、師の葬儀だった。昨年一月、高田良幻さんは九十八歳の天寿をまっとう。平尾さん自身、今は、何をしたいかわからない状態だという。

高田さんと会って、得たものはなんですか、と聞くと、

「眉間の皺かしら」

と笑うが、さすがに寂しそうである。

現在のとりあえずの目標は、高田良幻師の伝記の出版。同時にヘルパーの資格をとるべく勉強中だ。その一方でエンカウンターグループや内観療法など、さまざまな心理療法を勉強している。

「まあ私みたいな者でもひとに優越感を与えることくらいはできるでしょう。悩んでいるひとと一緒に苦しめる、そういうカウンセラーになれると思う。ときには踊り念仏もやってね」

パオは今年の大雪で潰れてしまったが、今度は半径五メートルの「桶」を入手、建てられる場所を探している。師僧の位牌を安置し、礼拝する空間が欲しいという。読者の中にどなたか、平尾さんの生き方に共感し、土地を提供してもいいという方はいないだろうか。

念仏信仰の系譜

中国編

須藤隆仙

4

道綽禪師の浄土教帰入

前述のように曇鸞どんらん大師による念仏の教えの興

隆は大変なものがありませんでしたが、大師の信仰を次に受け継つがれたのは道綽どうしやく禪師というお方でありました。お二方とも中国北地の出身ですから、

もうすでに中国では浄土教が南北にわたって広められていたわけであります。

これから道綽禪師について述べさせていたのですが、その前に、「大師」とか「禪師」といった称号について、ちょっと説明しておきますと、大師は、偉大なる師、優れた指導者の意であって（大師範・大導師）、高德の僧の尊称とし、また皇帝が高僧への贈名としたものです。禪師というのは、禪定（ぜんじやう）（梵語デイヤーナの漢訳）に通じた師という意味で、禪定とは心静かに瞑想して真理を追求することをいいます。禪師の号も皇帝が贈名として用いました。必ずしも禪宗の僧にのみ贈られた称号ではなかったのです。それで、今ここにいう道綽禪師も禪僧ではありませんが、禪師と尊称されているわけがあります。道綽禪師は西河汶水の玄中寺に住みましたので、西河禪師とも呼ばれております。

道綽禪師（以下「禪師」と略称）は、北齊武帝の河清元年（五六二）并州（へいしゅう）に生まれました。

先に述べた曇鸞大師が没してから二十一年後でありました。幼時からとても性格のよい子供さんだったそうであります。十四歳のとき出家しましたが、長じて『涅槃經』を詳しく勉強し、また空の思想を深く究めました。『涅槃經』は、一切の人すべてに仏性（ぶつしやう）（仏に成る種）があることを説き、空はすべてのものは因縁によって起るという教えであります。

ところが、あるとき、玄中寺に参詣し、そこにあつた曇鸞大師の事績を刻んだ碑を見て大変に感動し、浄土念仏の教えに帰依することを決心したのであります。禪師四十八歳のときであります。以上のことは四種類伝えられている禪師の伝記によつて知られるのでありますが、しかし研究者の中には、禪師の浄土教入信はこ

の四十八歳のとき突然なされたものではなく、それ以前から禅師は曇鸞大師の教えを知っておられ、念仏のことに感心しておられて、それが大師の碑を見るに及んで、決心されたものであらうと補足説を出される方がおられますが、山本仏骨『道綽教学の研究』、それはもっともな意見と思うのであります。

禅師の盛徳

それからというものは、禅師は、ひたすら阿弥陀仏を念じ、一日七万遍の念仏を称え、礼拝供養を絶え間なく相続し、『観無量寿経』を多くの人々に講説すること二百余回に及んだというのでありますから、それはもう驚くべき念仏信仰の業績でありました。

それだけではありません。寝るときには必ず阿弥陀如来様のおられる西方に向かって臥し、

いやしくも西に向かって鼻をかんたり用便をするようなことは、絶対になされなかったというのであります。

特に、人々に念仏をすすめることに大変な努力をなされ、どのくらい念仏の功德を積んだかの目安にするため、小豆を用いて念仏を称える方法を教えたのであります。多い人では、生涯を通じてその数八、九十石にも及んだというのですから、驚くべきことであります。後には木の実で数珠を作り、これで計算させました。禅師は八十四歳で亡くなられるのですが、六十七歳のときに、自分はもう往生するのではないかという予感を経験されました。そこで、そのことを弟子に話したところ、たちまち人々の間にその話が広まり、驚いて禅師のおられる玄中寺に大勢の人たちがやって来しました。ところか、このとき、不思議なことが起きたのであり

ます。それは、空中に七宝の船が現われ、それに曇鸞大師が乗っておられて、「あなたの現世での命はまだ尽きない」と言われたというのです。すると空中に仏様も現われ、華を降らせてくれたそうです。おそらくこれは、禪師がいかに曇鸞大師の教えを大切にしておられたか、また禪師の人徳がいかに大きかったかを物語る話でありましょう。

このほかにも、皇帝が禪師に珍宝を与えて供養したとか、禪師が蓮華を乾いた地にさすと、七日間は枯れなかったとか、さまざま徳を称える話が伝えられているのであります。

禪師の著述

禪師には『安樂集』『浄土論』『行図』『観経玄義』などの書物があつたと諸伝に見えておりますが、現存しているのは『安樂集』だけであ

ります。また『浄土論』と『安樂集』は同一のものではないかといわれております（安樂とは極樂浄土のこと）。

つまり、著述としては『安樂集』のみがはっきりしているわけですが、この書がまた、とてもとても大変な書物なのであります。どう大変かと申しますと、仏教大学仏教文化研究所編の『新浄土宗辞典』に、そのことが要領よく記されておりますので、左にそれを転記させていただきます。

「本書は、著者道綽が自己求道の体験より得た信念に立脚して、一代仏教を聖浄二門に分判し、末法劣機得脱の要道は偏に阿弥陀仏の西方浄土往生にあるべきことを勧進したものの（中略）中国浄土教史上の要書たるに止まらず、日本浄土教においてもかなり重視され、浄土教に対する功績はまことに大なるものがある」

禪師が自己求道の体験から得た信念、とありますが、これが重要なところであります。村上鉄瑞師の高著『道綽余聞』によりますと、禪師出家の動機は、大洪水で百姓が生活できなくなり、そのため口減らした寺へ預けられたのではないかと考察しておりますが、もしそうだとすると、禪師は弱年の頃から並々ならぬ苦難に遭遇しておられるわけでもあります。また出家した翌年には、北周武帝が「廃仏令」を出しているものであります。廃仏令といふのは、仏教を廃止せよとの命令であります。中国では時々これが行なわれているのです。さらに、世にはまた動乱そのものであります。北周が隋に滅ばされたのは、禪師二十歳のときであります。

こういった中で、禪師は末法の世ということ強く強く意識されたのであります。末法というのは、仏教の推移史を見る史観上の語なので

すが、仏教はあつてもそれを行ずる人がないという濁りきつた世をいうのであります。禪師は『安樂集』の中で、はっきりと「当今は末法、現にこれ五濁惡世なり」といつておられるのであります。釈尊滅後、いつから末法に入るかということについては、經論に諸説があり、禪師は『大集月藏經』に拠っているのですが、単にその年数を計算するというよりは、「現にこれ」というところが重大なのであります。現実今の世相は末法である、というのであります。深い現状認識からこの思想がきているわけであります。

事実この『安樂集』というのは、冒頭に「教興の由るところ、時に約し、機に被るを明して、勸めて浄土に帰せしむ」とあつて、時代の認識と人（機という）の認識とを、その出发点としているのでありまして、仏教が單なる空理空論

であつてはならぬとの立場から、現実に即した
仏教論を展開した画期的な書なのであります。

禅師の教への要点

右の『安樂集』（上・下二巻）によつて、禅師
の教への要点を述べてみましょう。

禅師が、時代を「五濁悪世の末法」と認識さ
れたのは前記のとおりです。五濁というのは、
時代が下るほどに熾烈さを増す五つの汚れ（濁）
をいうのでありまして、①劫濁（時代の汚れ）、
②見濁（ものの見方の汚れ）、③煩惱濁（精神的
汚れ）、④衆生濁（人間関係の汚れ）、⑤命濁（生
命の汚れ）^{（五濁をいうのです）}（『阿弥陀經』など
に説く）。

それでは人間性をどのように認識されたか
といえます。それは「さりとて自分も含めて「凡
夫」と認識されたのであります。『安樂集』上

巻に、衆生は聖（釈尊のこと）ご在世より遙か
に遠のいてゐるため、「浮浅暗鈍」であると述
べておられるのであります。禅師のこの人間観
は、もちろん乱世の当時を見ての実感でもあら
れたでしょうが、それよりも私は、これは尊敬
する曇鸞大師からの影響であらうと愚考してい
るのであります。といひますのは、同書下巻に、
曇鸞大師は「われ既に凡夫にして智慧浅短なり」
と仰せられたということが記されているのであ
ります。これはおそらく、玄中寺の曇鸞大師の
事績を刻んだ碑にそう刻まれてあつたのであり
ましょう。それで禅師は右のように記したのだ
と想像されるのであります。

この一連の事柄は、実に重大であります。私
は不肖をも顧みず、こうして愚文を連載させて
いただいているのですが、じつはその「念仏信
仰の系譜」といふのは、「念仏信仰とは凡夫性

への自覚である“ということを訴えたくて、それでこの一文を書いているのであります。法然上人が道綽・善導流の念仏といっておられるのは、じつにこの「凡夫の念仏」のことなのです。念仏は仏教全般にあるものなのですが、賢者の念仏もあれば、聖者の念仏もござります。その中で法然上人が主唱された念仏は、「凡夫の念仏」なのであります。法然上人ははっきりと、「われ浄土宗を立つる心は、凡夫の報土（最高）の浄土」に生まるることを、（手紙に「たのめなり」と仰せられておられます（『浄土随聞記』）。このことは、次回に述べる如く善導大師もそう教示しておられるのであります。

しかもそれは、もったいなくも釈尊以来の伝統なのであります。「念仏信仰の系譜」とは、まさに「凡夫性自覚の系譜」なのであります。禪師の教えは、時は末法、人は凡夫、というこ

とをはっきりと見定められたうえでの教えでありまして、ここが礎であります。この礎の上に、すばらしい禪師の教えが種々展開されています。

まず第一に挙げられるものは、一代仏教を聖道門と浄土門とに大別されたことであります。これが精神文化史上どんなに画期的なものであったかについては、『広辞苑』や『国語大辞典』などにも、ちゃんと「聖道門」「浄土門」の語が出てくるのであります。聖道門とは、自分の力で修行強学して悟りを得る方法であり、浄土門とは、念仏して極楽浄土に転生（往生）して悟りを得る方法であります。悟りを得るとは、仏に成ること（成仏）であり、そこから他を救済する活動が出てくるというのが仏教の目的であります。浄土に転生するとは、この世での生命を終えることですから、それから出てくる救済の力というのは、即ちその人の死後の遺徳を

いうのであります。凡夫に遺徳などあるかといぶかる方があるかもしれませんが、立派にあるのです。それは凡夫自体が仏様に救われたので、すから（即ち往生ということ）、そこから徳が出てくるのであります。それで私たちがきちんとお念仏を称えて野辺送りした故人には、よい思い出のみが残るものであります。悪い想い出は残りません。

禪師は、時は末法、人は凡夫であるから、浄土門のほうを選ぶようにと教えられ、法然上人は『選択集』に真つ先にそのことを紹介されたのであります。聖道門は龍樹菩薩や曇鸞大師が説かれた難行道（自力）に当たり、浄土門は易行道（他力）に当たります。

次に念仏は口に称えるのが主である（称名）と教えたこととあります。念仏には心に念ずるという意味もあるのですが、禪師ははっきりと

称名（阿弥陀仏のみ名を口に称える）ということとを教えられたのであります。それは『観無量寿経』にちゃんと「南無阿弥陀仏と称す」とあるからであります。

また禪師は、『安樂集』下巻に、念仏に優れた現世利益（除障得福・延年益寿）があることをも教えておられます。

当時、浄土教に対して、おかしい偏見説がありました。が、禪師はそれを正され、阿弥陀仏を報身、極楽浄土を報土として、最高の存在であることを示されたのであります。

この頃、三階教といって末法思想を説く一派があり、禪師も影響を受けたのではとする説もあります。が、禪師の思想は曇鸞大師からのものです。とにかく禪師は浄土教の重要な教義を整えられ、やがてそれが、お弟子である善導大師へと受け継がれるのであります。（函館・稱名寺住職）

日本の都市公園を考える

芝公園内の高層ビル計画と増上寺周辺の事情を中心に

(この原稿は平成六年八月二十五日に増上寺慈雲閣で行なわれた座談会をまとめたものです)

出席者



磯村英一氏



東郷尚武氏



内田雄造氏



真野龍海氏

磯村英一

名誉都民、地域改善啓発センター理事長、建設省緑化審議会委員長

東郷尚武

東京市政調査会常務理事、工学博士、元・東京都都市計画局長

内田雄造

東洋大学工学部建築学科教授

〈司会〉

真野龍海

浄土宗東京教区芝組組長、天光院住職、芝学園理事長

(順不動・敬称略)

司会 本日は地域改善啓発センター理事長でも

あり、建設省緑化審議会の委員長を務められておられる磯村英一先生、都市計画の行政に携わっていらした東京市政調査会常務理事、東郷尚武先

生、東洋大学で都市計画、まちづくりを専攻されている内田雄造先生にお集まりいただきました。都市、なかでも東京への人口、企業、情報などの集中過多による弊害は今に始まったことで



左から内田雄造先生、磯村英一先生、東郷尚武先生、真野龍海先生。

はありませんが、本日は浄土宗の大本山、増上寺のあります芝公園に計画されている超高層ビル（ホテル）建設問題を踏まえまして、「都市公園を考える」というテーマで、都市公園と環境について、皆さんで意見を交わしていただきたいと存じます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

磯村 実は私はこの公園の中にあります芝学園の出身でありますし、戦後マッカーサー指令部に、ここ芝を従来通りの公園として維持したいと陳情した張本人が私なのです。

司会 この芝公園とは浅からぬご縁というわけですね。

磯村 ええ、そうですね。

東京の公園と言えば、日比谷公園を除き上野、飛鳥山、芝が三大公園でして、その中でも芝公園が一番公園らしい公園と誰しもが考えていま



「大都市にこそ、大きな公園が必要です」——磯村

した。その芝公園をどうしても公園のままにしておきたく、都市計画の専門家の石川榮耀さんと二人でGHQの指令部に向かったのです。

しかし、従来通りとはいきませんで、指令部は芝をお寺に返すことになり、お寺は東京都に破格な価格で譲るといわれたのですが、当時の東京都は財政難で、その後一企業の所有となったと聞いています。

内田 江戸・東京と見みると、そこに住んでいた町人の数が数十万人、人口密度も、ヘクタール当たり一〇〇〇人を超えていたと思うのですが、上野や芝といった寺社境内、今日で言えば素晴らしい公園があったから、高密度の居住空間たり得たのだと思います。

幸いなことに、上野は結構よく維持されているわけですが、芝の公園の変貌は非常に問題だと思います。

司会 私も芝には永く居りますが、大分、様変わりしてしまいましたね。

日本の公園は冷遇されてきた

司会 さて、ニューヨークから帰国されたばかりの東郷先生に海外の都市公園などのことも踏まえ、日本の公園の現状をお聞かせいただきたいのですか。

東郷 わかりやすいと思いますので、数字で比較させていただきますが、東京の一人当たりの公園の面積は四・五平方メートル（ただし、東

京の一人当り都市公園面積は、三・一四平方メートルです。これは二〇〇〇年には六平方メートルに、という都の長期計画の考え方に基づいて増やしてきたものです。しかし、ロンドンの十七平方メートル、ニューヨークの十四平方メートルに比べると、その差はかなり開いています。

ニューヨークのセントラルパークは縦の方を歩くとブロック数で十数ブロック、二キロメートル近くありますから。

磯村 ニューヨークと東京は姉妹都市なんですが、ニューヨークが大都市として面目を保っているのは都市の真ん中にセントラルパークというかなり広い緑の空間があるからです。これはあくまで私の理想ですが、皇居から日比谷公園、

そしてこの芝公園までつないで、東京のセントラルパークにできたらと思います。

司会 都会の中の大公園、羨ましい限りですね。ですが、日本も数字で見る限り、公園は増えてはきている、ということですか。

東郷 はい、基本的には望ましい方向に向かっていきます。ただ問題は公園区域からはずして欲しいという要望が、一方であることです。都市計画公園という枠の中には、やはりいろいろな制約があります。ですから物を建てたい側は建設予定地を公園区域からはずしたい。しかし、さきほどの比較のとおり、日本は欧米諸国に比べ公園の面積が少ないわけで、現在は公園区域から削った時は、それに見合うだけのものを確

「長期的展望に立つた都市計画を」

磯村





「規制緩和されてしまった公園内の建ぺい率」——東郷

保しなければならない、という仕組みになっています。しかし、これだけ地価の高い東京で見合う土地を確保するのは、事実上不可能でもあり、公園の区域からはずすことについては、それほど心配はなくなっただけと思っています。

ただ気になるのは、昭和六十年代に民活導入ということ、さまざまな規制緩和の問題が出てきて、確か昭和六十二年だと思いますが、公園内で建てられる面積が五パーセントから二十パーセントに規制緩和されたことです。要するに公園の面積の中の二割には建築物が建てられる、ということになったのです。つまり、都市計画公園区域からはずすのではなく、公園内に物が建てやすくなったわけです。ですから、公

園での建築物は従来より慎重に都市計画全体の中で考えていかないといけないと思います。

司会 都市計画との関わりとなると、話が行政の問題になるかと思いますが、内田先生いかがですか。

内田 今の東郷先生のお話にあったように、都市計画行政の中で、公園というものは非常に冷遇されてきたのではないでしょうか。特に都市計画公園にはかなり曖昧なところがあって、例えば道路だと一度計画を決定してしまえば、国なり都なりがそれを変更することはほとんどない。もう少し柔軟であっても、思うぐらいなんです。ところが公園の場合、都市計画公園の中にホテルが建ったり、確かNHKも都市計画

公園用地に建てられたと思います。ですから、今回のこの超高層ホテルの計画を認めることで、芝公園内に次々とビルが建ってしまうのではないかと、とても危惧されます。

司会 一つの前例が次なる計画につながっていつてしまう。

内田 そうなんです。

両先生を前にしてこう言うのは問題でしょうが、都なり、区なりが、もう少し本気で取り組みが変わる、と私は思っているのですが。

例えば、臨海副都心ですが、あそこは土地が売れなくて都は四苦八苦している。こういうところ、公園内にある私有地とを交換してもいいのではないですか。私有地の所有者に優先的

に分譲して、公園を確保していく。こういう可能性を行政はもつと探るべきだと思います。その結果、やはり公園内に建物が建つのであれば、全体の計画に住民や区も積極的に参加し、望ましい計画を考えるべきだと思います。公開空地制度にしても行政だけでは、あまりうまくいつていないと思います。

このような計画には地域全体の人々が関わらべきでして、所有者の都合だけでプランニングしてしまうと、それこそなす崩し的になって、どんどん虫喰い状態になってしまうと、危惧するわけです。

司会 全体計画への関係者の積極的な参加がなくてはいけない、ということですね。

「大切なのは都市づくりへの文化的視点です」東郷





「都市計画には住民も参加すべきです」

内田

文化・歴史を共存させる

磯村 ここで、都市計画について、ちょっと視
点を変えたお話をさせていただきます。

外国人が日本に来て、日本人の宗教心につ
いての質問がない。京都に行ってお寺などを
見て、ああ、日本人の宗教と住民の生活との間に
つながりがあったということがわかるぐらいなの
です。日本の文化を語るとき、あらゆる分野に仏
教の影響があります。ここ芝公園はかつて増上
寺の境内ですね、ですから今日もここへ来る時
に、公園内の旧台徳院靈廟惣門、三門を挟んだ反
対側の有章院靈廟二天門を見て驚いたのですが、
増上寺の歴史、ひいては江戸の歴史でもある、こ

れら二つの門の一体メンテナンスはどうなってい
るのですか。あの寂れた状態は放っておけない。
恐らくこれも都市計画の長期的展望がないた
めに生じた弊害なのではないでしょうか。もし、
東京都なり、あるいは何らかの組織がメンテナ
ンスしていれば、こういう状態にはなっていな
かったでしょう。

司会 この間も中国から来た方に、一体誰がこ
れをみているのですか、と聞かれました。

内田 確か両方の門とも重要文化財ですから、
門そのものは文化財行政として維持管理しなけ
ればいけないはず。問題はその周辺を誰が
責任を持って、維持・管理していくのか。しか
も、どのような形で、ということにつながるわ

けてして、これも都市計画の抱える大きな問題の一つです。芝公園の問題にしても、容積率二〇〇パーセントで計画されている超高層ホテルの「周りを公園的にします」ということですが、何をもって公園的と言うのか、どこまで、だれが、どのように管理するのが問題です。

磯村 フィラデルフィアという都市がアメリカにあります、ベンジャミン・フランクリンが生まれ育ったところで、そのフランクリンの銅像が市役所の上にあるんです。ですからそれ以上高い建物は建ててはいけません。これなんかは、歴史や文化を大切にして、いる自治体の一つの姿勢ではないでしょうか。

東郷 そうですね。ロンドンにはセントポール

寺院がありますが、その周りにビルを建てる場合、ある特定の場所からセントポールが全部見えるような形にしないとイケないんです。外国にはこういう規制がしっかりと遵守されている国がたくさんあります。

内田 そうした諸外国に比べると、日本の場合、都市計画が文化行政と切り離されてきたことが多々あると思います。

例えば、奈良で言えば一番高い建物は奈良の大仏で新しい建物は大仏以下、というのが伝統だったんです。けれども、県の庁舎がこの伝統崩してしまっています。京都で言えば、まちから比叡山が見られるようにランドスケープデザインがあつたわけですが、それが新しい再開発によ

「私有地の公共管理、公共地の私的利用を」

内田



り、厳しい状況に追い込まれています。

日本においては都市行政、特に景観の行政なんかは文化の問題と切り離されているのは、残念なことです。

司会 実際に行政に携われていらっしやった東郷先生、このことについていかがですか。

東郷 現在の鈴木俊一都知事になって、昭和五十五年に「マイタウン構想懇談会」の最終報告が出たのですが、その時、私は都市づくり部会の事務局でしたが、その時に初めて都市づくりの中で、いわゆる都市景観とか都市美という柱を立てたのです。その後、都市美の懇談会が設置されて、実を結んだところもあります。しかし、まだまだ都市づくりへの文化的視点が十分ではありません。ですから先ほどもお話ができましたが、市民の声や、学識経験者の意見が反映される都市づくりがより必要でしょう。

効率を追いつめ過ぎてきた

司会 これまでのお話を聞いていて感じたので



超高层ビル群の中にあるニューヨークのセントラルパーク。



すが、あるべき都市づくり、あるいは理想的な都市計画公園の姿は十二分にわかつている。にもかかわらず、なぜ日本では、東京では、それが実践できないのでしょうか。

東郷 一つには法的な範囲内であれば、公園内の建築申請を最後には認めていかなければならないこと。そして、これは私個人としての意見ですが、日本はまだまだ経済優先で、文化面が立ち遅れていることを認めざるを得ない。この二つではないでしょうか。

司会 景観といった調和より経済が勝る、ということですね。

東郷 そういうことだと思えます。

司会 昔の港区の区役所は増上寺と対応してちゃんと屋根瓦でしたし、皇居の周辺の建物も昔は九階建てぐらいまででしたね。それが、合理主義の名のもと、経済効果の追及が優先され続

けている。直面している芝公園の今度の高層建築も同様のことがいえますね。

磯村 そのとおりです。ですから、いま一番大切なのは芝公園についての、全体の案をしっかりと作ることです。例えば芝学園が十階の校舎を建てるといえば、問題になると思います。それをホテルだから、地主だからいいということになれば、これも一つの問題だと私は思います。

そういえば、増上寺も改築の予定があるとのことですね。

司会 はい、会場に増上寺の執事長もお見えですが、改築計画中ですが、オーソドックスな法律の適用で一般的な高さの建物の予定です。ところが、片方は例外で、高層建築となる。

内田 やはり、それは今の公園計画が不十分だからです。確かに都の所有する土地はまとまりきっていないから、全体像を描きにくいのでし

よう。ですから、民有地だということを前提にして全体の計画を柔軟に考える必要があると思います。そしてそのためにも増上寺の立場からの芝公園の全体像があったほうが良いわけです。まわりのお寺さんや住民の方が皆でコンセンサスを作りあげることができれば理想的ですね。磯村 公共のものとはいえ、私的なものまで含めての、マクロ的な見方がまず計画の段階で必

要ですし、旧跡の惣門や二天門にこだわるわけではないのですが、維持・管理といった、その後の長期的な展望も欠くべからざるものだと思います。この点について、東郷先生はいかがお考えですか。

東郷 マクロ的な見方が必要と言われましたが、日本人には住まい方について、ある種の伝統的な考え方があったと思います。もともと日本は



芝公園にある旧台徳院霊廟惣門(上)、有章院霊廟二天門(下)。



東京タワーの下に広がる芝公園。

一戸建主義ですから、狭くても自分の庭を確保していく。ただでさえ狭いのをそれをしつかり囲い込む。これが基本で、公共のスペースをあまり重視しない。それに対し、欧米の大都市などでは住まいは高層のアパートメントですから、自分の家には庭がない。ですから、公共の公園は日光浴をしたり、お年寄りをはじめ、皆がくつろぐところという考え方が、その根っこにある。ですから公園の計画、維持などにも大変配慮する。このあたりが日本とアメリカ、英国では違っていたと思います。

内田 それに加えて日本の場合、私有地と公共用地の利用・管理の形態があまりにも劇然としすぎていると思います。私有地だけど公共的に管理する、公共地だけど私的な利用を許すとか、もう少し緩やかな発想で対処できればと思うのですか。

そして、都市では寺院とか神社の土地にも少し公共が援助をして、管理しても良いのではないかと個人的に思っています。

司会 なるほど、確かに増上寺の境内も立派な公園です。管理は増上寺でも、誰でもが自由に入れる。

残念ながら時間の制約もございます。最後に磯村先生にお願ひしたいのですか。

磯村 今日は皆さんのお話を聞かせていただくことを心掛けていたのですが、たいへん有意義な話だったと思います。都市計画自体が今まで直面しなかった問題にも触れていますので、おそらく都市計画の新しい問題提起の一つとなるでしょう。そしてまた、この議論は東京に限らず役立つ内容を持ったものだと思っています。

司会 皆さま、お忙しいところ、大変ありがとうございます。



●臨死の体験者が死の淵から生還して、まず見たものはきれいな花畑と、暗闇をつき抜けた果てに巨大な光を見たなどという証言をすると、それは生前の願望やら経験が脳のどこかに記憶されている、それが臨死の折に蘇ったにすぎないと判定する学者が大勢います。しかし、十月初旬の現在、かつて雑誌『文藝春秋』に連載された立花隆さんの著書『臨死体験』がどこの書店でもベスト・テンの上位を占める売行きだと聞くと、この書物が単にオカル的な興味だけで読者を集めているのではないというのがよく分かります。今月の「死は浄土の門」美濃部薫一師のお話を、皆さまはどのようにお読みになったでしょうか。少なくとも私は、この世に生かされているのは仏の本願力による確信された師の結論に至った貴重なご経験に、深い共感を覚えたことを申し添えたいと思います。

●座談会「日本の都市公園を考える」は、そもそも都市公園の未来を憂える名誉都民の磯村英一先生の熱情に、司会をつとめられた真野龍海先生らが共鳴して開催されたものです。磯村先生は卒寿をとうに超えられましたが、かつて市政の一翼を担われただけに愛都心の深さでは誰にも負けないくらいの方です。今回の都市公園の在り方を

考えるお話し合いの内容は、ただに大都市に限ったものでないことはよくおわかりいただけたと思いますし、本誌が喜んで誌面を提供した意義もそこにあります。地方在住の諸師にも何かの形でお役に立てば幸甚です。

●遅ればせながら、前号に巻末エッセーをお寄せくださった松谷みよ子氏が小学館文学賞を受賞されました。心よりお祝いを申しあげます。

●さて、今年の異常な暑さの夏もようやく過ぎ、どうやらふだんの日本の氣候がやっと戻ってきた気がする十月。それでも、十日現在の福岡ではまだ十二時間の給水制限が続いております。水と空気と安全はタダ、と錯覚していた我々日本人に、自然は大きな教訓を残してくれました。これから、都会の人間もお米や水を以前よりは大切にするに相違ありません。しかし、ハイチやルワンダから、人間のいのちの尊さを改めて教えてもらうような事件が起こらないことを切に祈りつつ。

(編集チーフ) 小川有順
編集スタッフ 栗田順一
齋藤晃道

編集室

長谷川岱潤
村田洋一
太田正孝
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていたいただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土 六十巻 十二月号 頒価六百元
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成六年十月二十五日
発行 平成六年十二月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 株式会社 文化カラー印刷
写真植字 文化フオートタイプ

〒一〇五東京都港区愛公園四七四明照会館内
発行所 法然上人鑽仰会
電話 〇三三五六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六



S★PPORO

私たちは味わい・ライブを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎてから

●ご協力をお願い: 自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を造る最大の基準は、その姿とかたちである。
つくりの強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した立派のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい、かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30ツインカムターボ プロラム
VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(%)主
な装備 ●VG30DET(V6ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンと車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したもの
です。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。